HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	言語的修復行動に関する語用論的研究 ： 中国語との比較を通して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	張, 玲玲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11176号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55332
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhang_Lingling_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　張　　玲　玲

主査　教　授　佐　藤　知　己
審査委員　副査　教　授　加　藤　重　広
副査　准教授　野　村　益　寛

学位論文題名
言語的修復行動に関する語用論的研究　–中国語との比較を通して–

本論文は，平成 25 年 11 月 29 日に提出され，同年 12 月 13 日に成立が認められた審査委員会において，口頭試問に先立つ二度の審査委員会（第 1 回 12 月 13 日開催，第 2 回平成 26 年 1 月 17 日開催）で内容を吟味して問題点を整理して，1 月 20 日に口頭試問を行い，その後の三度にわたる審査委員会（第 3 回 1 月 20 日口頭試問に引き続いて開催，第 4 回 1 月 28 日，第 5 回 1 月 29 日）を経て，学位授与が相当との結論を得たものである。この審査結果は，2 月 12 日の文学研究科教授会にて審査報告が主査からなされ, 2 月 21 日の投票をもって規程により学位授与が認められた。

以下，本論文の学術上の成果とその評価を含む審査のあらましについて述べる。

一般に，会話におけるトラブル（やりとりの中での言い間違いや聞き間違いなどの失行現象，誤解や解釈不備や不完全な理解などの不全現象，ポライトネス上の違反を含む言語行動など一般的な不首尾を広く含む）の「修復」を論じる場合，これまでは会話分析の従来の方法論を用いて会話データ全体を静的なテクストとして分析するのが一般的であった。しかし，この分析手法ではその時々で変わる会話参与者の知的状態の推移を含む精密な記述や分析はできない。本論文では，複合的な文脈を想定して動的な解釈形成を行う語用論の枠組み（動的語用論）を用いた分析を行っている点で，言語学的な会話分析の新たな地平を拓くものだということができる。また，本論文では「修復」を「(トラブルの事前回避や予防的抑制を含む）調整」と区分することを提案しており，さらに，発話の段階ごとに修復と調整の特徴を明確に論証してもいる。加えて，修復とフェイスバランスの保持・均衡化との相互作用などを論じ，日本語会話に関する研究成果をもとに中国語との対照研究も行っており，広い視野で問題を論じている点を評価することができる。これらの成果の一部は論文として公刊されており，研究会などで発表されているほかに，日本語学会・日本語用論学会・社会言語科学会などの全国学会，日本語教育国際研究大会などの国際学会でも発表され，評価されている。また，分析のためのデータはすでに蓄積され公開されているコーパスなどの会話データを利用するほかに，自ら会話データを収集して分析を行っている。会話データの集積は，収集のための計画・設計，記録データ（映像・音声）の文字データ化，トランスクリプションの定義や統一など種々の細かな作業を含むものであるが，これを自ら行って，他の研究者の利用にも供するように整理している点は，学位論文執筆の前段階の作業ではあるが，大いに評価すべきものである。

本論文の研究成果は，上に述べたように，従来の研究方法の不備を補う新たな枠組みを用意し直して進められた分析を中核としており，さらに(1)「調整」という新たな概念の提起，また，(2)修復・調整の形式と機能の類型化，(3)それらとポライトネスとの関係を具体的事実から細かく分析している点は，いずれも高く評価することができる。特に「調整」という分析概念は，修復されたという結果を先取りして帰納的に分析する際には得にくいもので，時系列にそった展開として演繹的に分析を重ねていく手法の可能性を示唆するものである。(3)の着眼点は，これまでにも，散発的には分析され，主張されてきたものであるが，分析手順のなかに整合的に取り入れており，統合的理論の一部をなす重要な成果として今後発展させていくことが見込まれる。

本論文は以上に述べたように重要な成果をいくつか含んでいるが，まったく欠点や難点がないわけではなく，先行研究の扱いに若干の不備があること，動的文脈論の扱いと個別分析における

解釈の恣意性の問題に解決すべき点が残っていることなど，改善を望むべき点は見られる。しかし，これらの点は，今後の研究の中である程度の時間をかけてより実用性のある分析の枠組みへと改善していくべきものでもあり，これらの問題点を割り引いても，なお，本論文の研究成果が高く評価されるべきとする見解はいささかも揺らぐものではない。概括的に言って，本論文が会話分析における修復の研究を新たな段階に進める大きな成果であることは明らかである。審査委員会は，仔細に論文を審査する中で，特にこの点を評価して，冒頭に述べたような手順を経て，審査委員全員の一致した結論として，博士（文学）の授与に値すると結論づけ，それを所定の手順を経て文学研究科教授会で審議した結果，学位授与が認められたものである。